

2004/12/11 UTCPワークショップ「身体の思考・感覚の論理」第一セッション

「身体は心について何を教えてくれるのか」

鈴木貴之 (UTCP)

われわれは心を持つと同時に、身体を持ち、環境の中で生きる存在である。これはある意味で自明の事柄だが、この事実に着目することで、心について、従来の心の哲学や心の科学における標準的な見解とは全く異なった見方が可能になるということが、近年盛んに論じられている。このような議論、すなわち「身体化された心」に関する議論には、どれだけの妥当性と可能性があるのだろうか。

現在の心の哲学・心の科学における標準的見解

- ①心とは、身体の内部、脳の内部という意味において、ある主体にとって内的なものである。(個体主義)
- ②心的活動は、脳が外界を表象する働きと、その表象を用いたさまざまな過程からなる。(表象主義)

認知科学における記号計算主義や古典的な人工知能研究が標準的見解の典型例。しかし、標準的見解の本質を上のように一般的な形で定式化するならば、心を内的表象にもとづいて理解する現在の心の哲学や認知科学の多くの立場は、標準的見解に属することになる。

身体化された心に関する三つのテーゼ

ここ二十年ほどの間に、われわれが身体を備え、環境の中で生きているという事実が、心を理解する上で決定的に重要であるということが、多くの論者によって主張されている。身体化された心に関する最大公約数的な主張は、以下の三つのテーゼとして整理できる。

(Clark 1997; 染谷 2004などを参照。この問題に関する先駆的な論者としては、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、デューイ、ギブソン、レイヴとウエンガー、ヴィゴツキーなどの名が挙げられることが多い。)

- ①知覚経験の本性に関する主張：われわれの知覚経験は身体と不可分の関係にある。

この点に関してもっとも詳細な議論を展開しているのは、メルロ＝ポンティとJ.J.ギブソンである。両者の主な主張は以下の二点である。

・伝統的な知覚理論は知覚経験を正しく捉えていない。われわれに直接与えられるのは世界そのものの知覚であり、純粋な感覚印象のようなものではない。

「真の哲学とは、世界を見ることをあらためて学ぶことである。」(Merleau-Ponty 1945, XVI)

「純粋な印象は、それゆえ単に見出すことができないばかりでなく、知覚されえないものであり、したがってまた知覚の契機として考えることができないものである。」(Merleau-Ponty 1945, 10)

「感覚的性質は知覚と同延であるどころか、好奇心ないし観察という態度の特殊な産物なのである。」(Merleau-Ponty 1945, 261)

「もしもこれら、明るさと色がさまざまに異なる点が見えるもの、直接知覚に与えられるもの、つまり感覚の所与であるならば、知覚の事実はほとんど奇跡である。」(Gibson 1979, 61)

・われわれの知覚経験において、世界は無視点的な現れ方をするのではなく、自らの身体運動の可能性と不可分な仕方で現れる。

「意識とは、根源的には「…と我思う」ではなく「我は…できる」である。」(Merleau-Ponty 1945, 160)

「物は私の身体の相関者である。…物は、それに対する私の身体の取り組みにおいて構成される。物は最初から悟性にとつての意義なのではなく、身体の洞察に対して開かれた構造である。」(Merleau-Ponty 1945, 369)

「対象を見るときにわれわれが知覚するのは、対象の性質ではなく、アフォーダンスである。」(Gibson 1979, 134)

「アフォーダンスの理論は、ものを見るとは、どのようにしてその間を動き回るかを見てとったり、それにどう対処するかを見てとったりすることであるということを含意する。」(Gibson 1979, 223)

第一のテーゼは標準的見解と両立可能。標準的見解をとる現在の哲学者や認知科学者は、要素主義的な経験主義や代理表象説を支持するわけではないので、直接経験されるものは感覚器官の興奮状態であるという前提を受け入れる必要はない(cf. 鈴木 2004)。また、知覚経験が無視点的で客観的な表象によって実現されているのではないという事実は、表象形式に関する制約をもたらすだけ。

②心の拡張に関する主張：身体や環境は心的活動の可能性を拡張する。

われわれが心的活動と見なすものにおいては、身体や環境が重要な（時には不可欠な）役割を果たしている。(cf. Clark 1997; 染谷 2004)

例：筆算では、手と紙を用いることによって、それらなしには不可能な複雑な計算が可能になる。

共同的な認知活動では、言語を用いることによって、個人では解決できない複雑な問題を解決したり、その成果を他者と共有することが可能になる。

第二のテーゼもまた、標準的見解と両立可能である。身体や環境を利用することによって、脳の認知的な負担が軽減されたり、脳だけでは不可能な複雑な認知が可能になったりすることはたしかである。しかし、このことから、すべての心的活動にとって身体や環境が不可欠であるということは帰結しない。また、筆算のような事例においても、その中核には、脳内での一桁の足し算やかけ算という内的過程があることにはかわりはない。

③身体・環境システムに関する主張：心的活動は身体・環境システム全体の活動である。

心的活動とは、脳の内部で生じる過程ではなく、身体を持った主体と、それを取り囲む環境からなる一つのシステム全体の活動である。

「心臓が有機体においてあるのと同じ仕方で、自己の身体は世界においてある。…自己の身体は世界と一つのシステムを形成している。」(Merleau-Ponty 1945, 235)

「知覚活動において、何かが視神経に沿って伝達されると仮定する必要はない。…われわれは視覚を、知覚系として考えることができる。脳はその単なる一部でしかない。…そのプロセスは一方向的伝達ではなく、循環的である。」(Gibson 1979, 61)

「移動や操作は、引き起こされるのでも命令されるのでもなく、制御される。…制御は動物・環境系にある。…行動は、規制されなくても規則的である。」(Gibson 1979, 240)

「心は身体や道具の中に埋め込まれており、どこまでが心の働きで、どこまでが身体や道具の働きであるとはっきり線が引けないような全体的な行為システムを形成している。」(河野2004, pp.234-235)

このような見方は、今日の心の哲学、認知科学における反表象主義、力学系理論などと呼ばれる立場と強い類縁性を示している(cf. Varela, Thompson, and Rosch 1991; Van Gelder 1995; Port and Van Gelder 1995)。たとえばヴァン・ゲルダーは、認知とは、主体と環境から構成される一つの力学系の働きであり、それは調速機によって制御された蒸気機関の働きなどと本質的に同類であると主張する。彼によれば、その働きを理解するためには内的表象を持ち出す必要はない。

ギブソニアンにも、力学系理論への言及が見られる。

「心理学が必要としているのは、漠然とシステム理論といわれているものの中で企てられつつある考え方である。」(Gibson 1979, 2)

運動系は、身体の内部に閉じて組織化しているのではなく、環境の中の情報とも協応の関係を結び、知覚情報をもそのシステムの一部としている。知覚と行為のカップリングを理解するためには、自己組織化の物理学を取り入れることが必要。(佐々木1994, pp.98-100)

この第三のテーゼが正しいとすれば、心的活動を脳内における表象を用いた内的過程として理解するという標準的見解は、根本的に修正を迫られることになる。

しかし、第三のテーゼは十分に説得的とはいえない。

心的活動は単なる力学系の一例という主張は反直観的。また、このような見方にもとづいて、心的活動に関して実質的な説明が可能であるとは思えない。(たとえば、満員電車内部の状態と、いわゆる認知にもとづく環境内での振る舞いを同様に理解することはできないのでは?)

心的活動を実現する力学系は、ある特別な種類の力学系、たとえば、神経系、身体、環境が複雑にカップリングしている力学系と考えることが可能かもしれない(cf. Keijzer 2001)。しかし、スケールの異なる複数の力学系の相互作用そのものに関する研究が未発達であり、このような理論の可能性は未知数。また、そのような複雑な力学系の内部には、表象と理解しうるものが見出されるかもしれない。

→心的活動を実現するシステムの特異性に関して、標準的見解よりも説得的な代案を提出しうるかどうかは未知数。

結論

身体化された心というキャッチフレーズは曖昧。その革新性を正しく評価するためには、内実を明確にする必要がある。標準的見解との真の対立点を明らかにすることで、はじめて両者の間に実質的な論争が可能になる。(代理表象説や古典的な記号計算主義を仮想敵とすることは非生産的。)

身体化された心に関する三つのテーゼのうち、最初の二つは標準的見解と両立可能。第三のものは両立不可能だが、そこから帰結する見方は、標準的見解に対する代案として、現在のところ十分に説得的なものではない。

文献

Clark, A., 1997, *Being There: Putting Brain, Body, and World Together Again*, MIT Press

Gibson, J. J., 1979, *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin

Keijzer, F., 2001, *Representation and Behavior*, MIT Press

河野哲也, 2004, 「存在の具体性-世界内存在と認知」信原幸弘編『シリーズ心の哲学II ロボット編』勁草書房

Merleau-Ponty. M., 1945, *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard

Port, R., and Van Gelder, T. (eds.), 1995, *Mind as Motion: Explorations in the Dynamics of Cognition*, MIT Press

佐々木正人, 1994, 『アフォーダンス-新しい認知の理論』岩波書店

染谷昌義, 2004, 「拡張する心-環境-内-存在としての認知活動」信原幸弘編『シリーズ心の哲学II ロボット編』勁草書房

鈴木貴之, 2004, 「クオリアと意識のハードプロブレム」信原幸弘編『シリーズ心の哲学I 人間編』勁草書房

Van Gelder, T., 1995, 'What might cognition be, if not computation?', *The Journal of Philosophy* 91, pp.345-381

Varela, F., Thompson, E., and Rosch, E., 1991, *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*, MIT Press